

三代藩主元次・役藍泉・

本城紫巖と文化活動

会員 清 木 素

一、三代藩主元次と棲息堂・松屋十八景記

元次は、天資英敏・和漢の学を好み、江戸在勤中はしばしば將軍綱吉の経書の講釈に列席し、早く伊藤仁斎に私淑していたが、相見る機会を得なかった。しかし、その長男の東涯や弟の蘭嶼には京で師事し、寛永四年（一七〇七）には二人に五人扶持を給していた。

元次は風雅を好み、常に園亭の勝、林泉の趣を詩歌に託し、漢詩・和歌・俳句にも専念した。居館の後ろに燕居読書の所として棲息堂を建設し、ここに儒臣を集めて経史を談論し、或は文人を会して詩歌を唱和していた。また、堂の東に文庫を設けて古今の書籍を所蔵した。

伊藤東涯は元次の求めによって棲息堂座右箴を作り、その序に「棲息堂は徳山毛利公の読書の室なり、侯平生学を好み書に耽る」と述べている。元次の愛顧を蒙った京都の林義端は「徳山雑吟」の跋文に「経史を自ら娛み、河間王の癖あり。遍く天下の秘籍を致す」と述べている。

御書物目録には、宝永五年（一七〇八）の序文があるが、それより後、元次が手に入れた図書も書き足され正徳六年四月（一七一六）新庄藩にお預けとなった直前に及んでおり、この目録によって元次の所蔵の図書の全貌を知ることができる。

しかし、この目録に記入されている膨大な図書は正

徳六年の改易後は、どのように保存されていたか不明である。居館をはじめとして武家屋敷に至るまで取毀され、繁華であった城下町も一朝にしてもの荒涼たる村落に戻った。これ等の図書が文庫に収蔵されたまま徳山の地に残ったと考えることは不可能に近い。元次の子女が萩に引き取られた時、宝物什器と共に萩に運ばれたのではあるまいか。

また、元次の遺書が何時徳山に帰ったかを明らかにする何の記録も残っていないという。

これより明治に至る長い年月元次の遺した図書は、一卷一部の散佚することなく徳山藩主の文庫に残ったと言う。これは偏に歴代の藩主が元次の偉業を景仰して元次の御書物目録の遺訓が忠実に遵守された結果に外ならなかった。

明治四年の廃藩置県の際、徳山の旧藩主の図書は膨大な部数になった。一〇代元功は、これから善本を選んで宮内省に献納した。これらは徳山毛利棲息堂蔵書目録の名で公刊した。

通計図書の部数は一〇八八部、冊数二〇九〇二冊と記録されている。

小藩の徳山藩にあって、これだけの図書を蒐集し購求することは、藩の財政を圧迫したことは明らかである。

特に、中国の学術文化の研究に欠くことの出来ない典籍が集められていることは、当時においては異例のことと考えられる。

元次の棲息堂の発想は、今日の全世界的平和主義文化国家の建設に与って力のあることを感じざるを得ない。

自然は文化の産みの親だとも言う。自然から教わり築き上げた文化、自然はそれに働きかける者に本当の姿を見せてくれる。

そよぐ風の音がする。夕焼けが美しい。雨上がりの葉っぱの上のキラキラ光る水玉を見つめることが出来る様な環境こそ、心の故郷と言える。目・耳・鼻・口・手足にとって美しい感性空間で、互いに仲良く心と心

が結ばれる場所が故郷なのだろう。

元次は、環境の美学に関心を寄せており、文化・平和の名君であったことに新たな感動を覚えるものである。

また、棲息堂の近くの松林の中の松屋に詩人・文士を多く招待し文化について談論しており、自らも風景一八景を選び、最も信頼していた岩国の宇都宮遷庵に詩を賦すことを命じている。

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 1 城山の茂陰 | 2 浜崎帰帆 | 3 泉原夕照 |
| 4 興元晚鐘 | 5 八坳淡雪 | 6 馬場の桜花 |
| 7 当南の列松 | 8 大河内秋月 | 9 前路の樵人 |
| 10 席上観海 | 11 蛇島盆石 | 12 松声聞濤 |
| 13 相島薫風 | 14 野島過雨 | 15 金崎漁舟 |
| 16 福田向崖 | 17 辻村炊飯 | 18 松屋対田 |
- 等の絶景を眺めながら、文才子と唱和談論した。

二、役藍泉と彩石園・藍泉亭・藍亭八勝

教学院は、不動明王を本尊としていたと言われるが

寺域はさほど広くはなかった。徳山府下の東端にあり一歩門を出ると田畑が広がり、数百歩も歩けば丘陵地帯、白沙に杉松が鬱蒼として茂り、その麓を栄溪と呼ばれる小川が流れ、青麦翠稻、紅葉緑蔬が四季折々の変化を見せてくれる。この曠原を流れる一筋の川が藍泉（藍川）であり、それが海に注ぐあたりの渚が采石と呼ばれていた。

ここを探訪すれば「天地万物我にあらざるなし」の心境にひたることができた。

その園内の書堂が藍泉亭であり、古今の詩人・文人と心を通わせる所でもあった。藍泉の文名が高まるにつれ文人の訪問が、その数を増してきた。その一人に長富充國がいる。充國は、徳山藩と関係深い亀井南冥と親しく、予想外の歓待に感動した充國は、次の様な詩を残している。

繡帙胸藏十万卷、下筆たひら立るに数千言を成す。

「書物をひもくとくと十万を讀破し、筆を下すとすぐさま数千言の文を作られる」采石道士の才能は、何と

優れたことかと驚嘆している。胸中に秘めた雄志は平素何を論議なされているのだろう。私は今清流に足を洗うような気持ちになろうとして、ぶらりと藍泉道士の門をくぐった。

道士は私を明園の上に招き、文を論じた途端もう道がここに備わっている。道士はいつも来客を好んでおられる。次々と訪れる来客の為に酒はたっぷり用意してある。人をそらさぬ話題は見事で、美しい詩のやりとりが一時続けられる。この園外の風光も見事だ。所謂、藍亭八勝と言われている。(来仙涼風、大乘晚鐘、鼓海遠帆、天門名月、東岡農圃、南浦漁歌、可原積雪、藍溪春花) 元次の松屋十八景と比較される風景である。海を見渡せば、仙人が住むかと思われる島々が絵のように点在している。藍泉の流れは近く清冷だ。曠原を歩けばおのずと歌が生まれ、春秋の時期とわかる。この風景とこの図柄は何とも賞めようがない。そこに住む主とその生きざまはとも真似られない。これだけ美しさが揃っていれば酔わずにはいられようか。

お別れしてから何時までも忘れられないのは当然のこと。おわかりですか。千載一遇の交わりはめったにないことを。明朝お別れすれば、互いに名残りは尽きぬ故、さあ私の歌に合わせて、あなたは杯をかたむけられよ。その歌声は庭前に流れ、梵鐘の音とともに四方に響くことでしょう。

予想外の歓待にすっかり感激した長富充國は、前述の詩を残して教学院をあとにしたのである。

三、亀井南冥と青木葵園・

本城紫巖・役藍泉との出会い

藍泉の竹馬の友の一人に青木葵園がいた。その当時の徳山藩は、書物に親しむ者が少なく、葵園は百方探索して書籍を求め、一〇余歳のころには先輩の右に出で、一文一詩を作る毎に秀才の名をほしいままにした。やがて東都に祇役し、滝鶴台より徂徠学を習い、本城紫巖と共に徂徠学の普及に努めた。

藍泉が初めて南冥の名を知ったのは、青木葵園から

南冥の文名がしきりに称賛されていることを聞き、後

南冥が東遊の時徳山に立ち寄り寄る機を見て、青木宅で一
○余人の士人・僧侶の心暖まる招宴に列した。時に南
冥三五歳・葵園三二歳・藍泉二七歳であった。

『呈南冥役観』によれば「あなたは千里の遠くにお
住いで、お目にかかりたいと、ここ何年も西の空を仰
いでおりました。お目にかかれて何という意義深い夕
でしょう。人はあなたのような天下の英才を慕うもの
ですし、この陽春の季節に聞こえてくるあなたの陽春
の曲に耳を傾けましょう。明朝あなたが徳山を出発な
されば、その作品は遠く海の果てまで響いて行くでし
ょう」と……。南冥は、これに和して「あなたにお出
会ってきたことを確かめようと旧知の様に遠慮なく盃
を傾けました。すがすがしい風が灯火を吹き、名月の
もとに忌憚なく語り尽くしました。酒に酔って一睡し
て空が明るくなる頃、鶴の鳴き声が、お城の中に消え
て行きました」と……。

やがて、紫巖は座を清溜亭に移し、次の文を南冥に

送っている。

「隠居暮らしのわが清溜亭は、早春の気が寒々とし
ております。庭内には、雑草が生い茂り茅屋を埋めて
います。ところが思いもよらず、この山近い野人の宅
に関西に有名な名士をお迎えできました。あなたの描
かれた花の絵は、あなたのお人柄そのままに麗しいの
に、世捨て人の私は、そのお礼としてどぶ酒を差し上
げるといふ不始末です。何もおもてなしもできません
が、酔うがままに徳府の官庫に幾多の珍書のあること
を申し上げるだけです」

藍泉等と亀井南冥との唯の一夜の邂逅は、賀茂真淵
と本居宣長との松阪の一夜の出会いにも似て、藍泉が
最も南冥の信頼を受けるに至った基因ともいうことが
出来る。

南冥は藍泉の手を握っている。「天地は广大であり、
その間に生きている人間も数限りはない。しかし、真
に同一臭味の者を求めると、巨大な天壤の間にいくば
くあるであろうか。冀くは子自愛せよ」と励ましてい

る。

鳴鳳館の名は、南冥が藩校の創設に最も力を尽くした奈古屋蔵人を通じて、藩主就馴の委嘱を受けて選んだものである。出典は、詩経の大雅の卷阿の章に、「鳳凰は鳴く、彼の高き岡に、梧桐は生ず、彼の朝の陽に、萋々萋々、誰々、喈々と」の詩がある。

萋々萋々は、ともに草木の茂る様をいい、誰々喈々は、鳥のやさしく清らかな声を言っており、学園の環境の美しさを示している。

鳳凰を賢者に比し、梧桐の木は君主をあらわしている。君主が天下を治めるために賢者を求めると、賢者自ずからその所に集まるといふ意を示している。

四、まとめ

——風景の美学に憧憬しての文化活動——

風景は、視覚のみならず、聴覚・嗅覚、さらに触覚・味覚等の五感を動員して環境の美を享受するものと考え、えてもよいように思われる。風景は折々に異なり、朝

夕の風景も異なり、変化してきわまらぬ眺めである。

日月の輝き、風雨のうるおい、霜雪の清らかさ、雲煙のたなびき、山もそばだち、河の流れ、入江の深さ、海の広さ、鳥のさえざり、獣の動き、草木の繁茂すべてが風景の美学であり、先人の美しい感性空間を作ったの平和文化活動を今一度見直していきたいものである。

